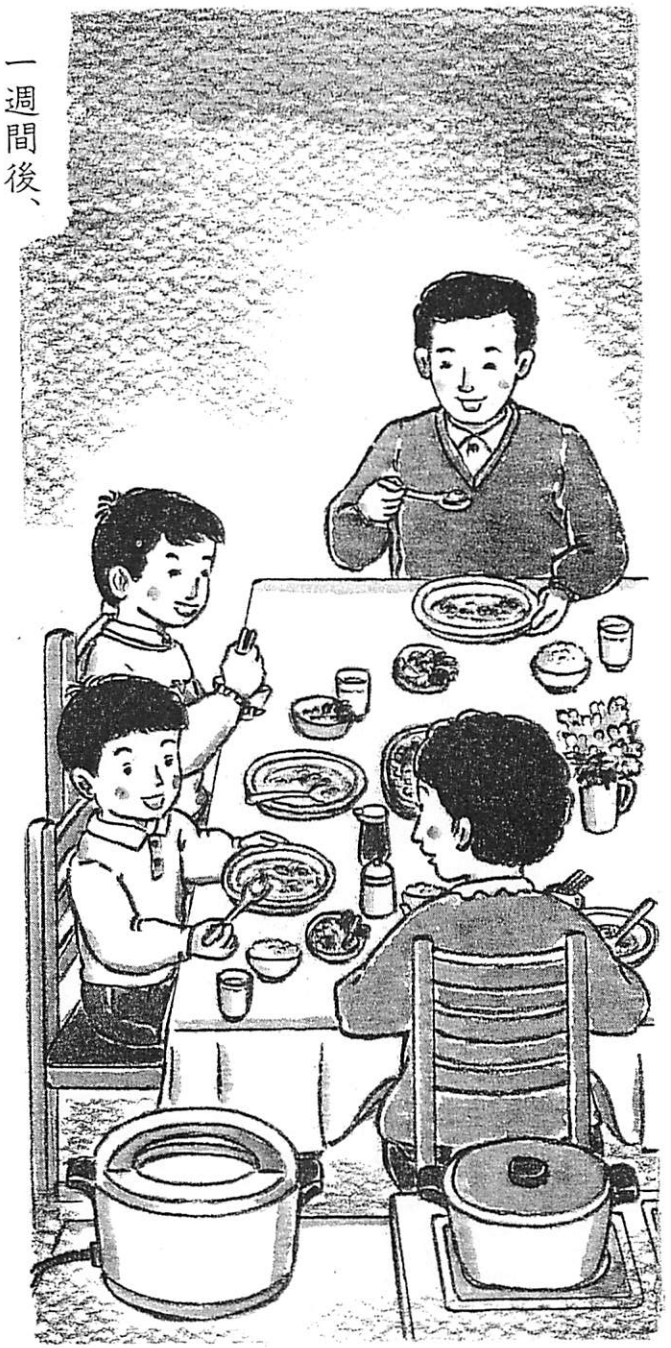
一週間後、

「学校へ行ってきまあす。」

と元気にかけ出していく弟の後ろから、ぼくもいっしょにかけ出しながら、青空のようなさわやかさが心に広がっていきました。



8 絵地図の思い出

もうすぐ学年の遠足です。今年は、グループ対こうのオリエンテーリングをすることになっています。そのために、クラスから実行委員を二人選ぶことになりました。わたしは、恵さんをさそって、二人で立候補しました。幸い二人ともすんなり実行委員になることができました。

実行委員は、進行係、記録係、問題係、しおり係の四つに分かれて仕事をします。わたしと恵さんは、問題係を希望したのですが、希望者が多くてなれませんでした。結局、恵さんの意見で、だれも引き受け手がいなかったしおり係をしぶしぶ二人ですることになりました。

始めてみると、思ったより順調に進みました。ところが、一番大切な絵地図をかくところで困ってしまいました。何度かいてもうまくかけないのです。

「恵さんのせいよ。だからしおり係なんてやめておけばよかったのに。」
わたしは、責めるように言いました。
「そんなこと言ったって、仕方ないでしょ。洋子さんももっとがんばってよ。」
「いくらがんばっても無理よ。わたしたちには、この仕事が向いていないんだから。」
わたしがもっと強い調子で言ったものだから、恵さんはもうそれっきり何も言おうとしませんでした。二人とも、机の上に置いたかきかけの絵地図をじっと見つめたままだまってしまいました。
しばらくすると、恵さんは、ぽつりと小さな声で言いました。
「正彦さんにたのんでみようか。正彦さん絵がじょうずだから。」
「えっ、正彦さんに。」
恵さんが口を開けてくれたのでほっとしましたが、恵さんの言葉はわたしには意外でした。というのは、今、クラスでは男子と女子の仲があまりよくなく、

男子にたのむなんて、わたしには思いもよらないことだったからです。
「うん、正彦さんなら、きっとすてきな絵地図をかいてくれると思うの。」
「でも、わたしはたのみにくいな。ふだんほとんど話もしていないでしょ。」
「だったら、わたしがたのんでみる。ね、そうしよう。」
恵さんの顔は、さっきまでとちがって、とても明るくなっていました。
次の日の朝、恵さんと学校に向かって歩いていると、前の方を正彦さんたちが歩いていました。
「あっ、正彦さんだ。」
恵さんは、すっとかけだして行きました。わたしも、後を追いかけました。
「正彦さん、おはよう。あのう。」
恵さんが話しかけようとしたのですが、正彦さんは、知らん顔をして他の男の子たちといっしょに行ってしまいました。
「正彦さん、他の男の子たちといっしょだからはずかしいんじゃない。」

さみしそうにしている恵さんを、元気づけようと思って言いました。

学校に着くと、正彦さんは、まだげん関のところにいます。他の男の子たちは、もう教室に行ってしまったようです。恵さんは、もう一度声をかけました。

「正彦さん、悪いけど、しおり係の仕事、手伝ってもらえない。わたしたち、絵地図がうまくかけないのよ。」

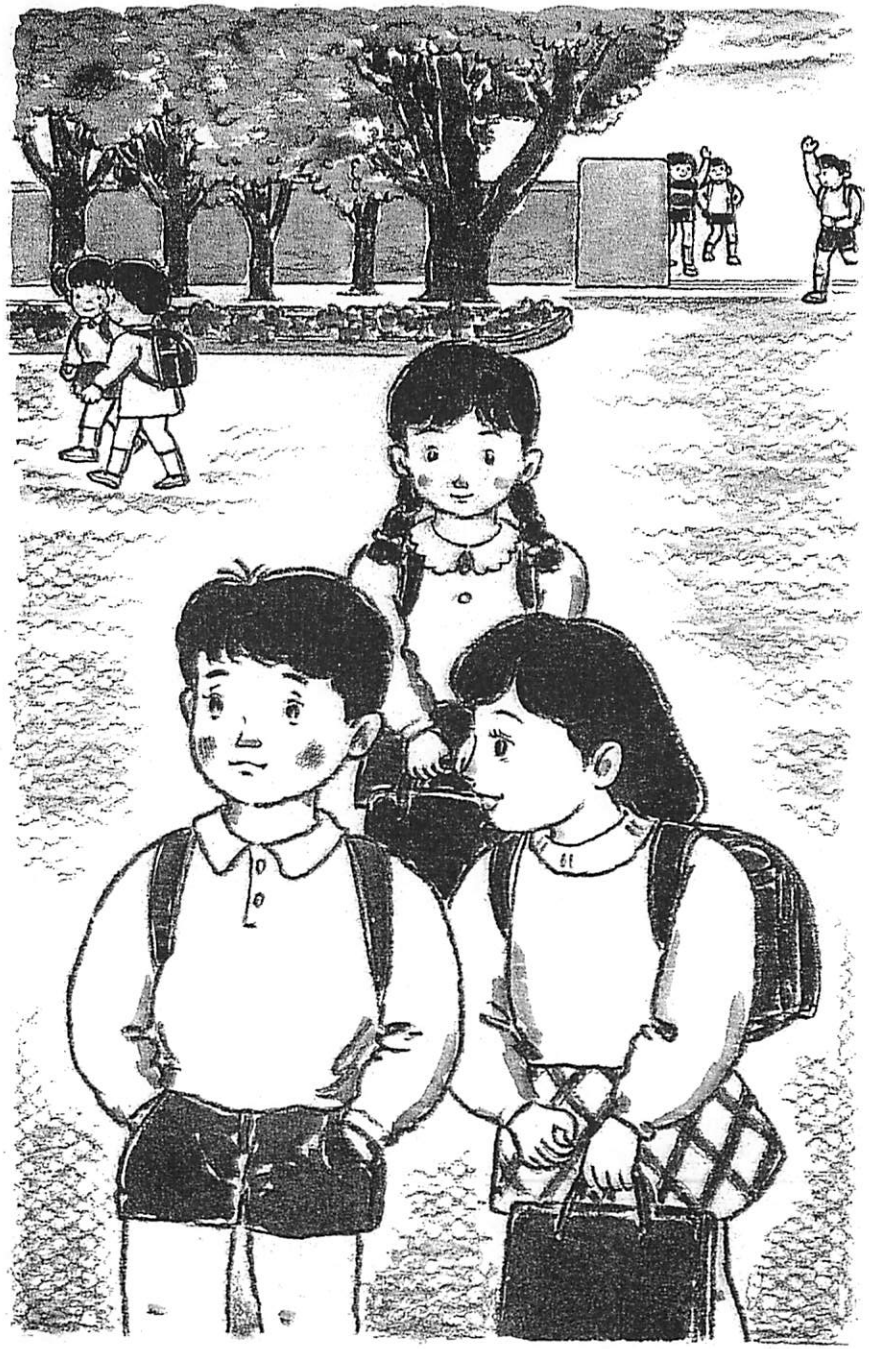
恵さんは、ここまでいっきに言うと、正彦さんの顔をじっと見つめました。

「うん、いいよ。いつまで。」

前の方を見たままちょっとぶっきらぼうな言い方でした。でも、正彦さんの返事は確(たし)かに引き受けてくれるというものでした。

「えっ、本当。うれしい。」

そう言うと、恵さんはわたしの方をふり返りました。その顔は、いつものすてきな笑(え)顔でした。



次の日の朝、恵さんの机の上にでき上がった絵地図が置いてありました。わたしたちがかきたかったとおりのすてきな絵地図です。

「わあ、すてき。」

恵さんの声に、教室にいた男子も女子もみんな集まってきました。恵さんがみんなに見せるように持ち上げると、うれしそうなかん声が教室中に広がりました。もちろん、その中にはちょっと照れくさそうな顔をした正彦さんがいました。

「ようし、ぼくは、印刷を手伝ってあげるよ。」

健一さんの声に合わせるかのように、

「ぼくも手伝うよ。」

と言う声が聞こえてきました。

今年の遠足は、何だかとても思い出深いものになりそうです。

9 ペルーは泣いている

「サンバにルンバ、躍動するリズム、ほとばしる情熱と明るさ。わたしには、南アメリカ大陸の風が合っている。」

母校のバレーボールチームを学生日本一にした加藤明さん（アキラ）は、大きな夢をいだいて、ペルー女子バレーボールチームの監督になりました。

ペルーチームの選手は、十八人。各地から有望な選手が集まってきました。

「練習は土曜、日曜をのぞく毎日、夕方から五時間とする。」

アキラは、選手に言いわたしました。一日に一時間程度の練習しかしていなかった選手たちは、口々に不満を言いました。

夜の練習で家族との時間をもてなくなった選手の中には、家族を練習場に連れてくるものもいました。強いボールを受けるきびしい練習を見た父親が、

8　絵地図の思い出

2－(3)　互いに信頼し，学び合って友情を深め，男女仲よく協力し助け合う。(信頼友情，男女協力)

1主題設定の理由

〈ねらいとする価値について〉

人は，周りの人と理解し合い，信頼し合うことなしに，よりよい人間関係を築いていくことはできない。お互いのよさを認め合い，相手を信頼し，その人格を尊重し合うことにより，のぞましい人間関係が生み出される。また，このような理解と信頼に根ざした人間関係においてこそ，相手の成功や幸せを願いつつ切磋琢磨し合い，互いに成長することができるのではないだろうか。異性間においても，集団の中で共に生きていくものとして，性差による行動のちがいなどはあっても，男女の別なく信頼関係を築いていくことは大切なことである。

〈子どもの実態について〉

五年生ともなると，これまでよりもなお交友関係に広がりと親密さが増してくる。だが反面，青年前期にさしかかったこの時期の子どもは，異性を意識しすぎるあまり，ぎこちなくなったり必要以上に相手を遠ざけようとする傾向がある。そこで，無意識のうちに作ってしまう溝を一歩乗り越えるだけで，互いの持ち味を生かし望ましい信頼関係を築くことができることに気付かせたい。

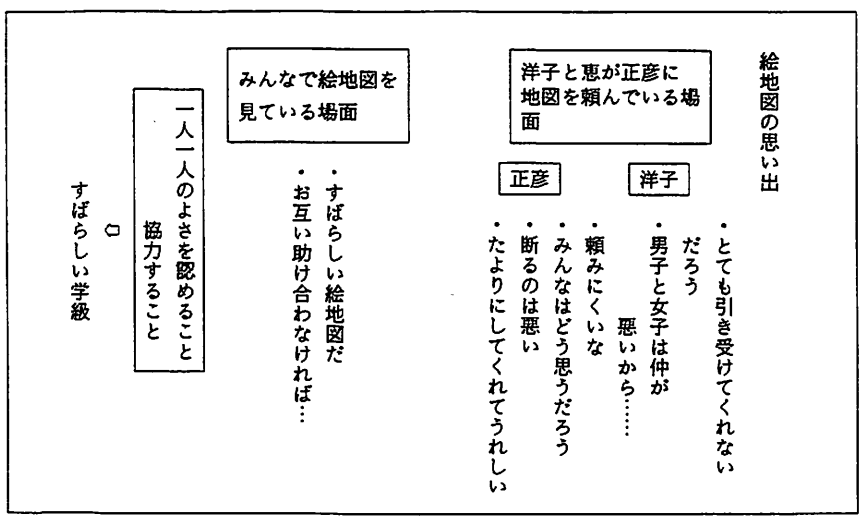
〈資料について〉

本資料は，男女の信頼や協力，助け合いなどに焦点を当て，どのような関係を築くことが望ましいかについて自覚を図ることを意図して構成されたものである。正彦が仲間と一緒のときは知らん顔をするが，一人になると引き受けてくれたことについて，正彦の心境を多様な角度から読み取らせたい。周囲の仲間に対する思いや自分が頼まれたことへの思いを追求する過程では，日頃の自分たちの経験に照らして考えさせていきたい。また，最後の場面を手がかりにして，男女の望ましい関係は，一人一人がもつ個性やよさを素直に認めることによって築くことができるという点をとらえさせたい。

2ねらい

互いに信頼し，男女仲よく助け合おうとする心情を育てる。

□板書



3展開

学　習　活　動	支援上の留意点
(1)　男女で一緒に仕事をするときの気持ちについて話し合う。	・　ねらいとする価値にかかわる意識がもてるようにする。
(2)　資料「絵地図の思い出」を読み，登場人物の気持ちについて話し合う。 ①　正彦さんに頼もうと恵が言ったとき，洋子はどんな気持ちだったでしょう。 ・女子の私たちが頼んだのでは，とても引き受けてはくれないだろう。 ・絵が上手な正彦さんがかいてくれたらいいけど，クラスでは男子と女子のなかが悪いからだめだろう。 ・ほとんど話もしたことがないから，頼みにくいな。	・　それまでのこの学級の男女関係に注目して，洋子自身のとまどいや引き受けてくれる可能性などにも気付くことができるよう助言する。
②　最初に恵に声をかけられてから引き受けるまでに，正彦はどんなことを考えたでしょう。 ・引き受けるとみんな（男の子たち）はどう思うだろう。 ・せっかくの頼みを断るのは悪いかな。 ・ぼくをたよりにしてくれてうれしい。	・　周囲の仲間を気づかい，知らん顔をしてしまうが，頼んできた女の子のことを思い，頼みを引き受けようかと考える正彦の気持ちが共感的にとらえられるよう働きかける。
③　正彦がかいた絵地図を見て，クラスのみんなはどんなことを思ったでしょう。 ・すばらしい絵地図だな。さすが正彦さんだ。 ・照れてるけど正彦さんは，喜んでもらえていいな。 ・正彦さんは女の子からの頼みをきいてあげて優しいなあ。 ・ぼくも，はずかしがってばかりいなくて，女の子たちを手伝おうかな。	・　最後の場面の雰囲気を手がかりにして，自由に考えられるよう環境作りをする。
(3)　今まで，男女でどのように協力してきたかを話し合う。 ○　今まで男女が協力できたことで，どんなことがありましたか。また，その時は，どんな気持ちでしたか。 ・工作をする時に，男子に手伝ってもらってうれしかった。 ・家庭科の時間，男子に教えてと頼まれたので，さいほうの仕方を教えた。そのことで仲よくなれたような気がする。	・　男女のそれぞれの特性のちがいはあっても，それぞれのよさを認め合って，男女で協力していこうとする心情を高めることができるようにする。
(4)　教師の話を聞く。	・　学級の仲間は，それぞれが特有の個性や能力をもっていることを具体的な事例を挙げて示し，性別にこだわらず互いに協力することの大切さを話す。